

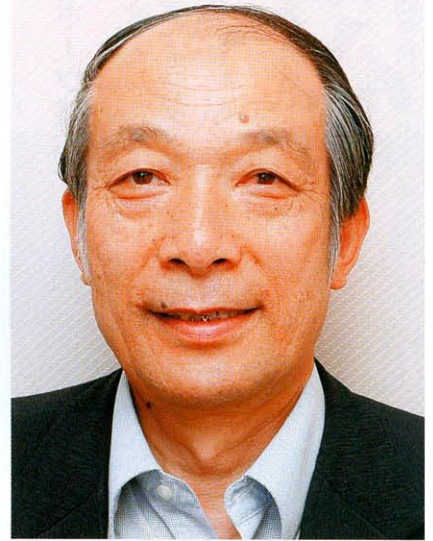
手作りの麴にこだわり

簸上清酒合名会社（鳥根県奥出雲町、田村明男代表）の杜氏（とうじ）松本年正さん（63）は出雲杜氏組合の新酒品評会で、3年連続して最優秀賞に輝いた。昨夏の猛暑で酒米が硬かったが、コメを水につける時間を短くし、芳醇（ほうじゅん）な香りで、すっきりとした後味に仕上げた。今年は新しい酵母に挑戦した。「出来が心配だったが順調に発酵が進み、いい大吟醸ができた」と腐心を振り返る。

酒造りに関わって46年。「麴（こうじ）作りが一番大切。17歳の時に初めて酒蔵に入り、杜氏に麴作りを指導してもらった経験が今に生きている」。機械化が進み、麴の温度管理も自動調整してくれる。しかし、「数字には表れないが、人間が管理したものが確実にうまい」と手作りにこだわる。

副組合長を務める杜氏組合は高齢化が進む。「以前は季節雇用が主で、組合を通じて蔵元に行く杜氏が多かったが、今は直接雇用が増えた。形は違うが、酒造りの技術は守りたい」と話し、若手に自分の技術を包み隠さず伝えるつもりだ。

簸上清酒
松本年正さん



ブライダルギャラリーノバ花工房米子店
橋井智子さん

感性生かした表現指導

大山のふもとの庭園結婚式場「プリムローズガーデン」（鳥取県大山町飯戸）で、園内の花を自由に摘んで素材にするフラワーアレンジメント教室が27日、開かれる。教室を企画し、同式場の花装飾を手掛けるブライダルギャラリーノバ花工房米子店チーフの橋井智子さん（50）は「自然の素晴らしさや花の魅力を伝えたい」と意欲をみなぎらせる。

2000年に勤務していた米子市役所を辞め、花の道を志した。大阪の花屋やフランスで装飾技術を学び、2010年から同式場の担当としてブーケの製作など年間に200回の結婚式を演出する。

毎朝、庭園で摘んだ花をアレンジし敷地内のカフェに飾っていたところ、式場の社長の目に留まり、園内の花を生かした教室を開くことになった。1万6000坪の庭園は、6月からバラやシャクヤクなど100種の花が咲き始める。「受講者1人1人摘む花が違う。その人の感性を生かした表現方法を指導したい」と楽しみにする。

社業の海外進出は必須

シートシャッター製造の小松電機産業(株)（松江市乃木福富町）は5月、ソウルに現地法人「小松コリア」を設立した。本社から邦人第1号として小松コリアに転勤になった製造部部长補佐の宮崎聖児さん（30）は「海外展開のモデルとなるような体制を整えていきたい」と抱負を話す。

小松コリアは小松電機産業が海外市場の開拓に向け、工場と併せて新設。韓国国内をはじめ、アジアなどに輸出する商品の生産・販売拠点と位置付ける。

現地法人は製造から資材管理、経理、営業などの業務全般を担当。「経理関係は初めてで不安もあるが、ソウル社内や本社のサポートなども受けながらやっていきたい」。今後の展開を考えた中で海外進出は必須と感じ、チャンスがもらえるなら国外で挑戦してみたいという思いはあった。海外赴任に際して大きな心配はないが、「言葉、文化が違う中で仕事をしていくためにはコミュニケーション能力を身に付けないと」と気持ちを引き締める。

小松電機産業
宮崎聖児さん

